

<資料紹介>  
県博所蔵の染織資料Ⅲ  
—経浮花織—

與那嶺 一子

(沖縄県立博物館)

幸 喜 新

(沖縄市経済文化部)

The textile item on Okinawa Prefectural Museum  
— “Tateuki-Hana-ori”, Supplementary wrap weaving —

Ichiko YONAMINE

(Okinawa Prefectural Museum)

Shin KOKI

(Okinawa city)

### I. はじめに

沖縄は多くの素材と技法の織物があることで知られる。その中に「花織」と呼ばれる紋織物がある。これまでの研究の結果、花織には①地組織が浮いて紋を成すもの（写真1、2）と、②地組織に浮糸（紋糸）を織り込むもの（写真3、4、5）があることが分かっている。これらの花織はかつての琉球圏内、奄美から与那国までの地域に点在するかたちで残っている（図1）。これらの織り方や模様の表現などは、同じ技法でも微妙に異なるが、与那国や首里を除き、それらの花織の技法は長く途絶えていたため（註1）、その系譜や関係については殆ど解明されていない。

これまで、木綿紺地の平織組織に別色の浮糸が加わる織物は、読谷山地方のものと一くくりで考えられていた。しかし、最近の研究で、縦方向に浮糸の浮く花織（写真4）は、沖縄市の知花、登川（旧美里間切）などで織られていたことが確認された（図2／註2）。

当館には、木綿紺地の平織組織に縦方向に浮糸が浮く花織の染織資料が6件あるが、1996年受け入れの資料No.6を除き、全て台帳名称は「読谷山花織」となっている。これらの資料は沖縄市登川又は知花地域などで織られたことが明らかになったので、そのことも含めて資料紹介することにした。経浮花織は、沖縄市知花地区で多くその例が残されていたため、現在、「知花花織」（註3）として復元作業が行われている。今回、ここでは、これ

まで、紹介されることの少なかった経浮花織を取り上げて解説する。

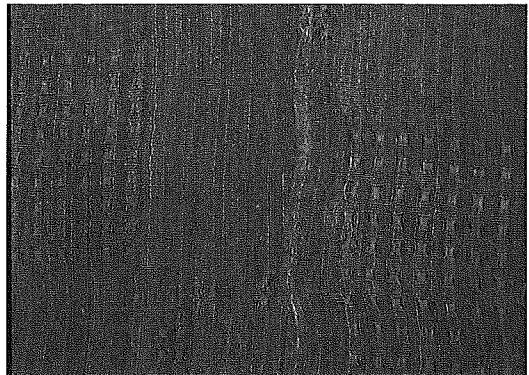


写真1：両面浮花織

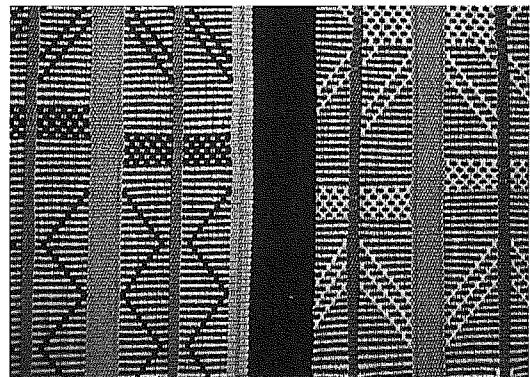


写真2：変化畝織 (グーシ花織)



写真3：縦浮花織

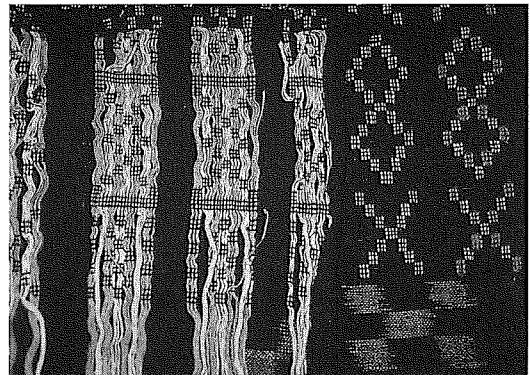


写真4：経浮花織

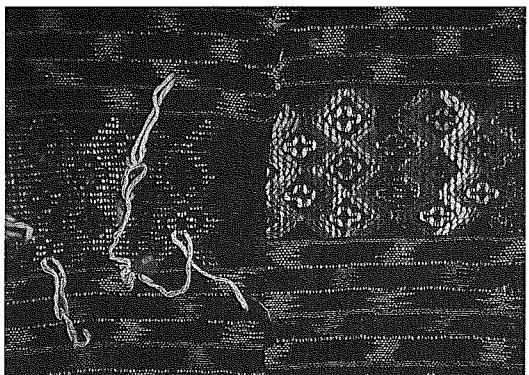


写真5：縫取花織

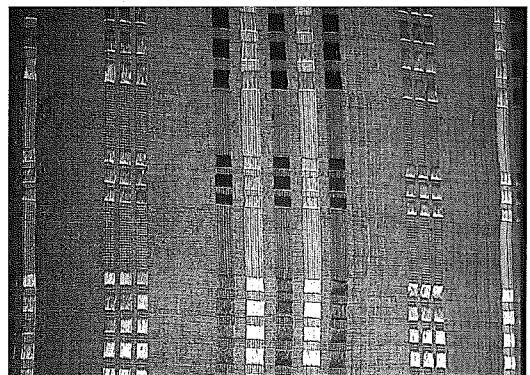


写真6：道屯 (ロートン) 織

図1) 琉球列島における花織分布

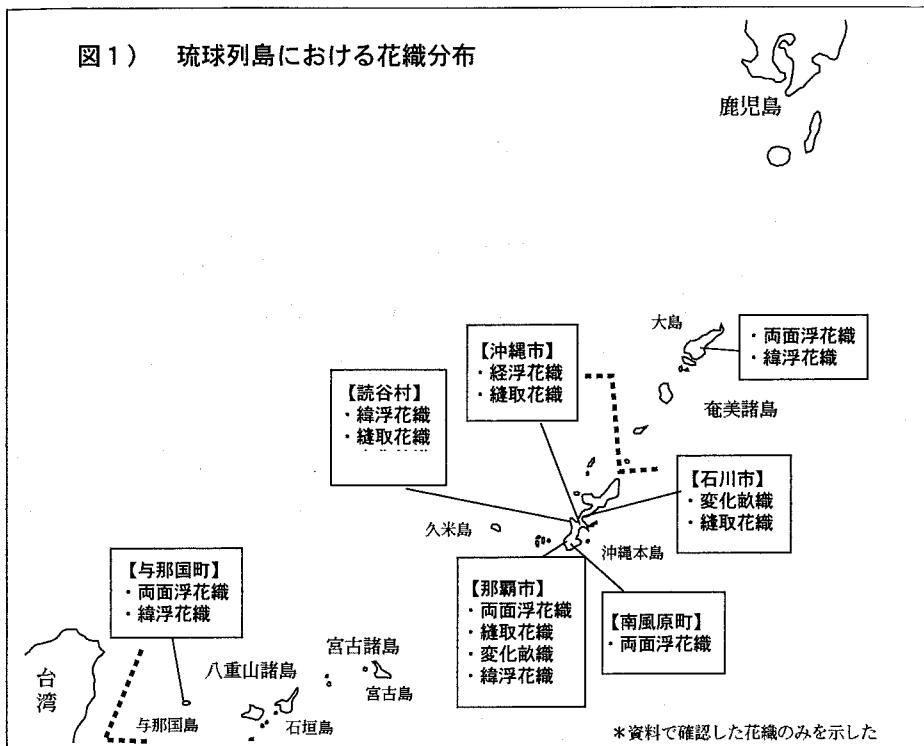
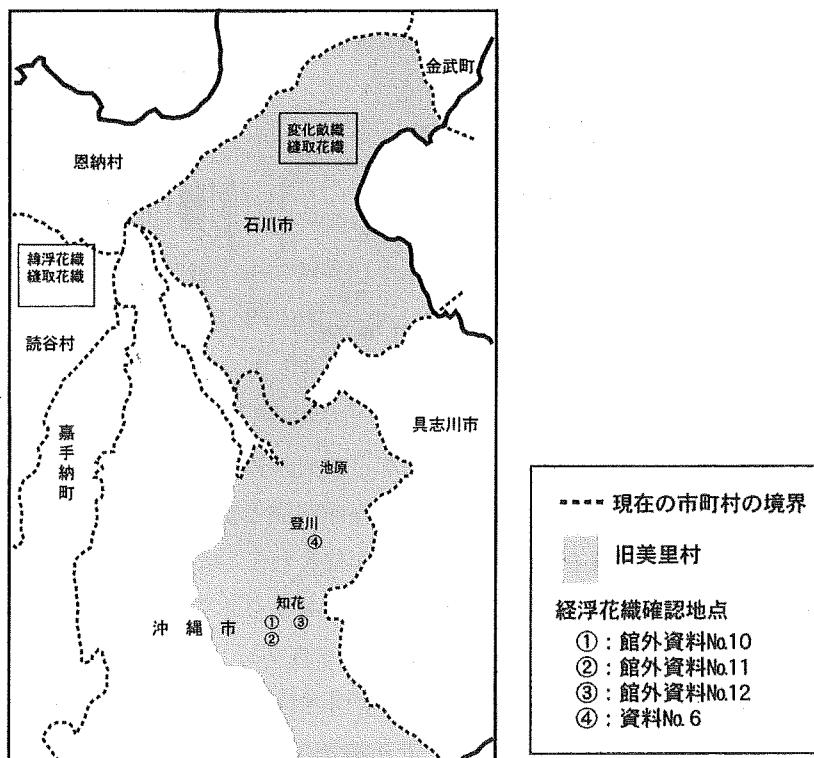


図2 沖縄市における経浮花織資料の確認分布



## II. 「経浮花織」の概要

### 【経浮花織とは】

織物には平織・綾織・繡子織といった三つの基本となる組織（織り方）があり、それを基本にいろいろな布へと変化する。沖縄の織物は平織組織を基に様々なたちへ展開され、糸が浮いて模様を織りなす浮織物も平織組織から誘導される。

経浮花織は、地組織の平織に浮糸を組合せたもので、布の表面では縦方向に模様を作りだし、裏面では浮糸（俗に遊糸）が平織組織に貼り併せたように表れる（写真4、7／図3）。縦方向に模様を表すものに道屯（ロートン）織（写真6）があるが、これは浮糸が平織組織と一体となって模様をあらわし、経浮花織とは異なる。

この織物は、知花地域で「ハナウイ」、登川地域では「ウキウイ」と称されている。また登川では、特に裏に小紋紅型を袷せた着物（資料No.6）については「ウスデークジン」と呼んでいる。この種の経浮花織の着物は、旧暦の8月15日に行われる白太鼓（ウスデーク）衣裳として着用されていた。また、他の花織衣裳（館外資料No.11）の場合も祭の場で使われた。

経浮花織の織物技術は、長いこと途絶えていたが、地元に残されていた染織資料や聞き取り調査から、明治期後半までは織られていたことも判った。

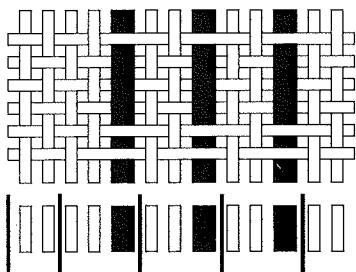


図3-1 経浮花織の組織

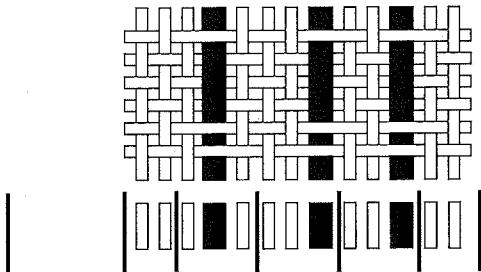


図3-2 浮糸を入れ間違った時の組織



### 【経浮花織の素材】

素材は木綿を中心に、芭蕉、絹、羊毛などの天然纖維が使用されている。衣裳に使われる地糸の経と緯は木綿がほとんどである。経浮花織と縫取織を併用したティーサージ（館外資料No.1／表1）の場合は、地糸に芭蕉が使われていた。また、浮糸は、木綿、絹の素材が確認でき、単糸を2本取りした双糸や、双糸を2本引きそろえにしたものを使い、糸の太さや撚り加減を工夫した跡がみられる（写真7）。羊毛は、ティーサージの花糸（縫取織の模様を表す糸。以後花糸とする）に使用されている。知花・登川の聞き取り調査から、木綿は昭和初期まで栽培されていたことが確認できた（註4）。また芭蕉は戦前までは盛

んに織られていて、昭和10年代になると輸入されたフィリピン苧（マニラ麻）が使用されたことも聞取りとこの地域に伝わる他の染織資料から判った。

絹は明治後期に桑畑の作付けについての資料がみられる（註5）が、直接自家製として使用したかわからない。羊毛については、どのような経路で入手したのか、これも現時点では判らない。

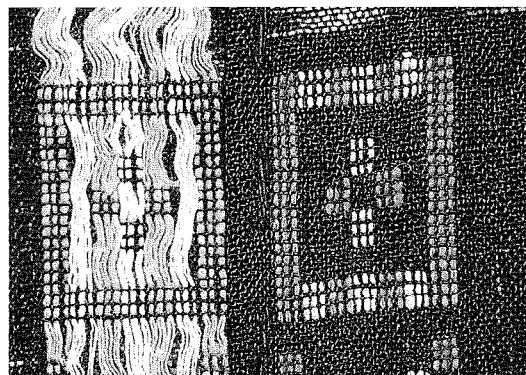


写真7：経浮花織裏表面

### 【経浮花織の染材】

今回調査を行った当館およびその他の染織資料から染材をみると、地糸の染色は青系統がほとんどである。また、浮糸は赤系統と白系統で、赤系統は2種類の色相がみられる。縫取花織の花糸には、赤、緑など何色か確認できることを補足しておく。

これらの色を、文献、染色実験等から考察すると（註6）、青系統は琉球藍（学名：Strobilanthes cusia）が考えられる。また、明治後期になるとみやこ染（化学染料）が普及するため、みやこ染の可能性も考えられる。

赤系統の染材については、染色実験などからスオウ（学名：Caesalpinia sappn）、グーリー（学名：Smilax china var. kara）などが考えられる。

これらの染色は地元で行なわれただけではなく、泊り込みで那覇で染めた話（註7）や、藍染屋が泡瀬や比謝川沿にあったこと（註8）などから、他の地域で染色をしたことなども考えられる。

赤系統の染材については、読谷山花織の手巾に使用されている赤の糸について、田中俊雄氏が「トウガシイ（唐糸）」と述べていて（註9）、染色された糸を購入して使用したとも考えられる。

また、資料No.2・3・4のように、浮糸の赤味の退色を嫌ったのか、意図的に顔料で補色した様子がみられる。

浮糸は、赤系統の色がほとんどだが、沖縄市にある個人蔵の資料には、一部に青味の浮糸を使用しているものがある。

### 【経浮花織の技法】

この花織がどのような形で織られたのかは不明である。現在、その技法を経験していた者はすでにおらず、聞き取りなどでも確信をつくような答は得られなかつた。調査した染

織資料から織り技法を考察してみると、いくつかの疑問点が挙げられる。

一つはどのような織機を用いたかである。経浮花織の製織は聞き取り調査や染織資料から地機で織られたのではないかと考えられるが、時代背景から考察すると、経浮花織が織られたとする明治40年頃は、これまでの地機にとつて変わられ高機（改良機）が導入された時期である。これまで行なわれた再現の仕事は全て高機で試みられてきた（註10、12）。

また経糸はどのように仕掛けられたか。経糸は地糸と浮糸を分けて二重ちぎりで織機に仕掛けをしたと考えられる（写真8）。沖縄県工芸指導所が昭和51・53年度に経浮花織の試作研究を行った際に、二重ちぎりをしている（註10）。また、読谷山花織の與那嶺貞氏は機仕掛けについて、二重ちぎりではないかと述べていた（註11）。さらに昭和48・55年大城志津子氏が経浮花織を再現した際にも、同様の仕掛けで織られていたこと（註12）などから、ちぎりは二つであった可能性が高い（地機ではマチジャー（巻板））。

浮模様を表す方法には、平織を織る地綜続と浮模様を作る花綜続を分け、必要に応じて花綜続の枚数を増減させる方法（写真9）と、竹グシ等で浮模様を表す方法（写真10）が考えられる。

綜続については、聞き取り調査で確信の持てる情報は得られなかつたが、技術的な側面から花綜続を使ったのではないかと考える。竹グシの方法だと、浮糸のすくい方を間違えたならばそのつど直すことが可能である。しかし花綜続の場合だと、一度仕掛けたら織あげ

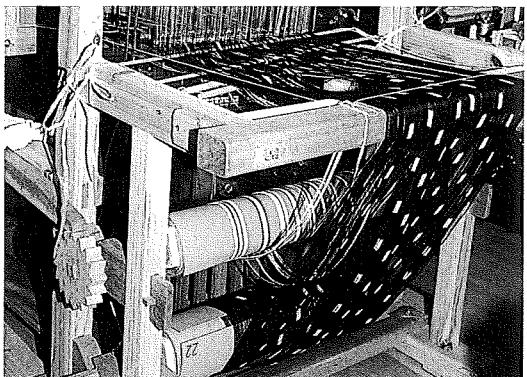


写真8：二重ちぎり構造

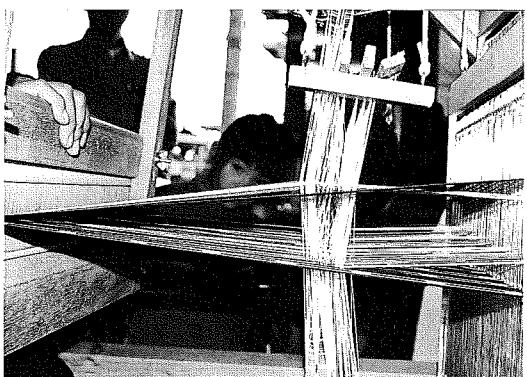


写真9：花綜続

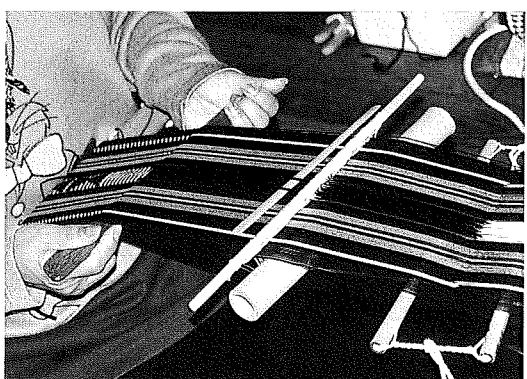


写真10：竹グシを使用する

るまで同じすくい方で花綜続を上下させなければならぬ。調査した染織資料の一部に織始めから織上がりまで浮糸が図3-1とは異なる組織で続く部分があること（図3-2）、技法・技術の復元を試みた際（註2）、異なる浮模様の列で模様が重なりあう場合、花綜続を使用することにより、より近い浮模様を織り成すことが容易にできたことだ。

また、田中俊雄氏は館外資料No.1のティーサージの経浮花織について「綜続花織」と解説している（註13）。このようなことから、現段階では花綜続を使用した可能性が一番高いと考える。

織機、経糸の機仕掛け、浮模様を表す方法については、ここで述べた以外の可能性もあり、今後の研究課題である。

#### 【経浮花織の模様構成】

経浮花織は、基本となる模様の連続した構成がみられず、画一化されない特徴がある。染織資料の形態が大小に関わらず、決まったパターンを連続して構成することがなく、模様は常に変化に飛んでいる。

経浮花織が貢納布であるならば、絵図に従つて模様構成されたものを織らされるか、絵図がなかったとしても、管理と検査を受けて納めることになる。しかし、残された経浮花

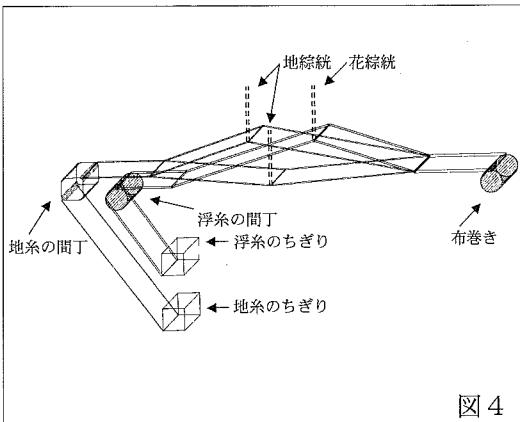


図4

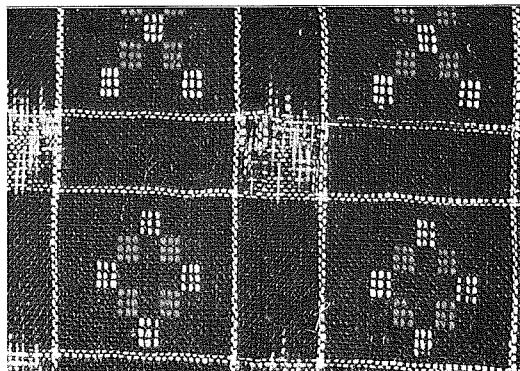


写真11：点ハナ

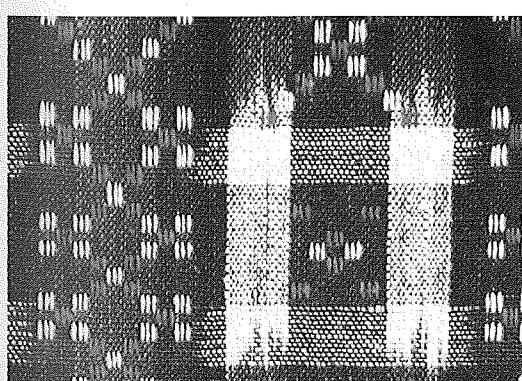


写真12：飛ハナ

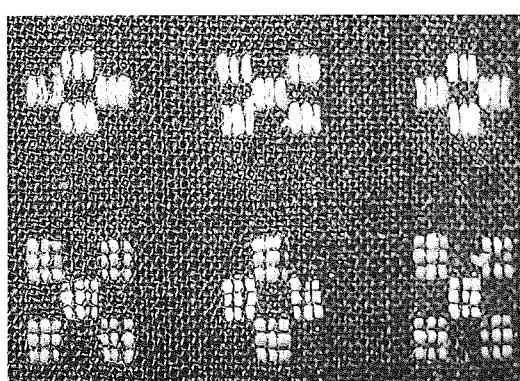


写真13：点ハナ、飛ハナ併用

織の資料からは、その厳しさは感じられない。むしろそれらの制度から放たれ、織手が自らの祭の為に、自由奔放な模様を楽しみながら織ったものだと考えられる。

経浮花織には「点ハナ」（9～20の点が一つのまとまりとなってハナを構成する／写真11、図5）、飛ハナ（緯糸を2段～数段浮いてハナを構成する／写真12、図3）などがある。模様の構成は、「絣と併用」（資料No.1、2）、「格子と絣と併用」（資料No.3、4、5、6）、「縫取花織と併用」（館外資料No.1）などがみられる。また「点ハナ」、「飛ハナ」（館外資料No.2／写真13）を併用する例もある。当館の資料は全て「点ハナ」である。

### 【今後の研究課題】

経浮花織技法の染織資料は、長く「読谷山花織」として位置付けられていた。これまで多くの関係者によって行われてきた染織資料の調査や、聞き取り調査などから、沖縄市知花地域を中心とした登川などから多く産出されたものであることが判った。しかし「戦前に織った経験者が既に生存していない」「地元に残されている実物資料が少ない」ことなどから、素材、染料、技法や模様などについて、経浮花織そのものをさらに解明してゆくことは困難である。また、この染織技法が、何処からどのようにしてこの地域に伝わったかについては殆ど解っていない。

そのために、今後次のような調査が必要である。

- 1 県内、県外、国外に散逸した実物資料の確認調査。
- 2 隣接する地域の類似の織物（緯浮花織、グーシ花織）の技法調査。
- 3 国外の類似の織物（経浮の織物）の調査。
- 4 経浮花織が織られていた当時の政治・経済などの歴史・民俗調査。

1の調査により、経浮花織の技法や模様構成などの分類と地域（知花・登川など）による違いなどが解明できるのではないか。2や3の調査により、系譜や途絶えてしまったかつての織り方など見出せると考える。また、経浮花織が与えた地域社会への影響などを総合的に考察するためには4の調査も必要となる。それは単に、技法・技術の体系化にとどまらず、これまで継承されてきた祭祀儀礼から見い出される精神性など、心のよりどころとしての染織文化を語ることができるのでないか。

最後に、資料をまとめにあたり、日本民藝館、サントリー美術館、鐘紡株式会社、鹿児島県大島紬技術指導センター、平田ハル氏、宮里正子氏、吉戸直氏、当銘正幸氏、池原ノブ氏、新里秀子氏、金城苗子氏、大城慧子氏、比嘉順豊氏にご教授並びにご協力いただいた。ここに記してお礼申し上げる。さらに、今後も課題の解決のために、収集家、研究者、知花地域の皆様など関係者のご理解とご協力をあおぎたい。

## 館外所蔵経浮花織資料一覧

(平成12年12月現在)

No.	資料名	数量 形態	寸法(cm)	織技法	所蔵者	備考
1	ティーサージ	1 手巾	縦69.5 横23.5	経浮花織／緯紗／ 緯紗／縫取織	日本民藝館	地糸は芭蕉。
2	紋織裂 紺地花織	1 裂	縦52.4 横27.5	経浮花織	サントリー美術館	佐々木コレクション
3	紋織小裂	1 裂	縦16.1 横15.8	経浮花織／格子縞	サントリー美術館	佐々木コレクション
4	紬入花織着物	1 衣裳	丈119.3 桁66.8	経浮花織／格子縞 ／経緯紗	鐘紡株式会社	
5	紬入花織裂	1 裂	縦8.9 横9.7	経浮花織／経緯紗	鐘紡株式会社	
6	経浮花織(格子に紬)	1 裂	縦6.1 横6.7	経浮花織／格子縞 ／経緯紗	南風原 文化センター	裂帳に貼付／木崎コレクション
7	経浮花織(紬入り)	1 裂	縦8.3 横5.9	経浮花織／経緯紗	南風原 文化センター	裂帳に貼付／木崎コレクション
8	経浮花織裂	1 裂	縦33.0 横40.6	経浮花織／経緯紗	ホノルル美術館 (USA)	1988年の調査で確認
9	木綿紺地格子に緯紗経浮 花織着尺	1 反物	巾36.5 長1.250	経浮花織／格子縞 ／経緯紗	国立東洋美術館	『在欧調査報告書』で確認 (ロシア)
10	知花花織・馬乗袴	1 衣裳	胴58 丈85.5	経浮花織／経紬	個人蔵	沖縄市指定文化財
11	知花花織・馬乗り上着・ 踊り衣裳	1 衣裳	丈97.0 桁64.0	経浮花織／経緯紗	個人蔵	沖縄市指定文化財
12	知花花織・胴衣	1 衣裳	丈92.5 桁66.8	経浮花織／経緯紗	個人蔵	
13	沖縄市知花の花織胴衣	1 衣裳	丈91.0 桁63.8	経浮花織／経緯紗	個人蔵	「読谷山花織展」図録(図版26)に掲載
14	紺地経浮花織着物(紬入 り)	1 衣裳	丈120.4 桁72.8	経浮花織／経紬	個人蔵	
15	紺地格子に経緯紗経浮 花織	1 裂	縦112.0 横35.5	経浮花織／格子縞 ／経緯紗	個人蔵	
16	紺地絹縞に経紬経浮花	1 裂	縦111.0 横34.7	経浮花織／絹縞／ 経紬	個人蔵	
17	紺地格子に経緯紗経浮 花織	1 裂	縦5.5 横9.0	経浮花織／格子縞 ／経緯紗	個人蔵	大道弘雄著『琉球裂』昭 28号(20部限定)に貼付
18	木綿紺地経緯紗経浮花 織衣裳	1 衣裳	丈91.0 桁59.5	経浮花織／経緯紗	個人蔵	登川／ウスデーク衣裳
19	木綿紺地経浮花織胴服	1 衣裳	丈67.0 桁52.0	経浮花織／格子縞 ／経緯紗	個人蔵	登川／ウスデーク衣裳／ 明治20年
20	木綿紺地格子緯紗経浮 花織衣裳(ワタジン)	1 衣裳	丈112.0 桁60.4	経浮花織／格子縞 ／経緯紗	個人蔵	旧美里村
21	木綿紺地経緯紗経浮花 織衣裳(ワタジン)	1 衣裳	丈121.3 桁69.5	経浮花織／経緯紗	個人蔵	旧美里村
22	木綿紺地格子経緯紗経 浮花織衣裳(ワタジン)	1 衣裳	丈125.0 桁63.5	経浮花織／格子縞 ／経緯紗	個人蔵	旧美里村／明治初か
23	木綿紺地経格子に経緯紗 経浮花織衣裳(ワタジン)	1 衣裳	丈111.0 桁64.4	経浮花織／格子縞 ／経緯紗	個人蔵	旧美里村／明治か
24	木綿紺地格子経緯紗経 浮花織衣裳(ワタジン)	1 衣裳	丈113.5 桁63.6	経浮花織／格子縞 ／経緯紗	個人蔵	
25	木綿紺地経緯紗経浮花 織衣裳(ワタジン)	1 衣裳	丈106.0 桁61.5	経浮花織／経緯紗	個人蔵	

## 資料紹介

資料 No. : 1

資料名：紋織裂

台帳番号：431

素 材：地（経：木綿单糸S撚り／緯：木綿单糸S撚り）浮糸（木綿单糸2本取り／S甘撚り）

織 技 法：経浮花織・経緯絣

織 密 度：経22本/cm・緯17~18本/cm

染 色：地（経緯：濃紺→琉球藍）

浮（経：白・赤→?）

絢（緯：白）

資料の特徴：浮糸の配列は、経は4列だが、緯の浮きは3から5段と一定ではない（図5）。

由来・来歴：1952年、田中俊雄・玲子両氏より寄贈された「沖縄織物裂地集」の78枚の1片。昭和14年頃収集。

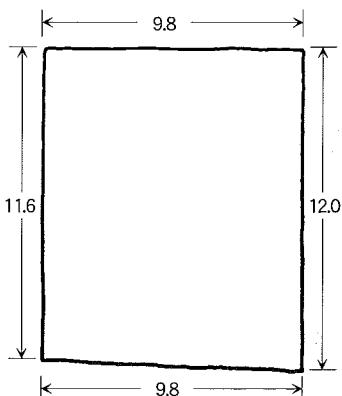
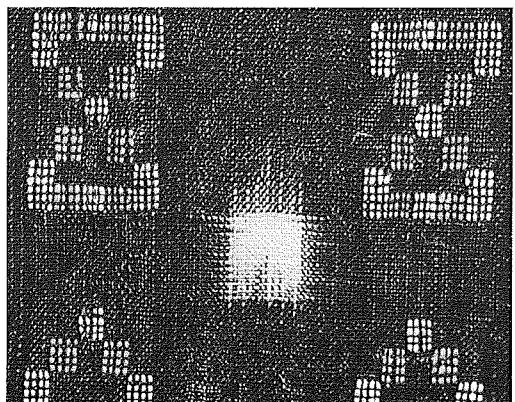
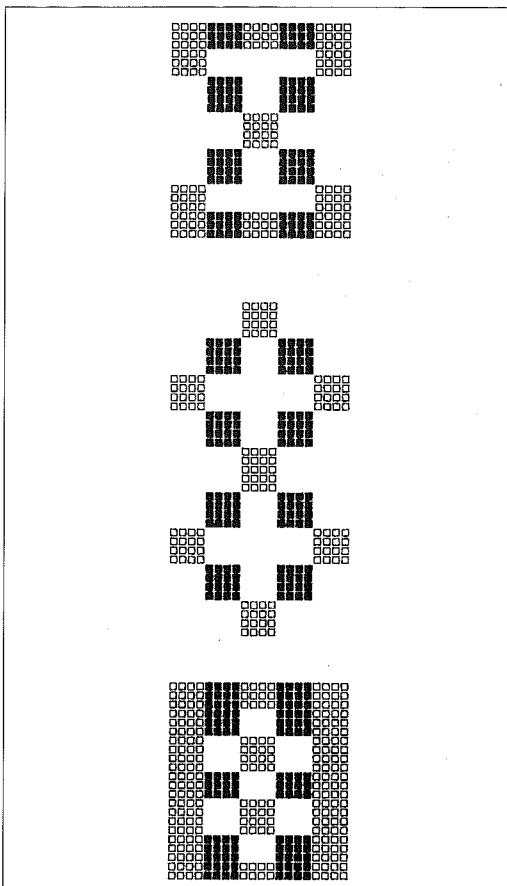
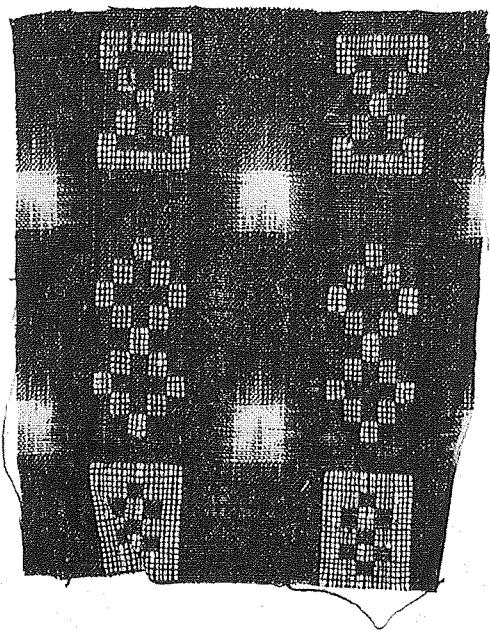


図5 浮模様のパターン

資料 No. : 2

資料名称：読谷山花織胴衣

台帳番号：1452

素 材：地（経：木綿単糸／緯：木綿単糸）

浮糸（木綿単糸2本取り）

織の技法：経浮花織・緯紗

織の密度：経28本/cm・緯18本/cm

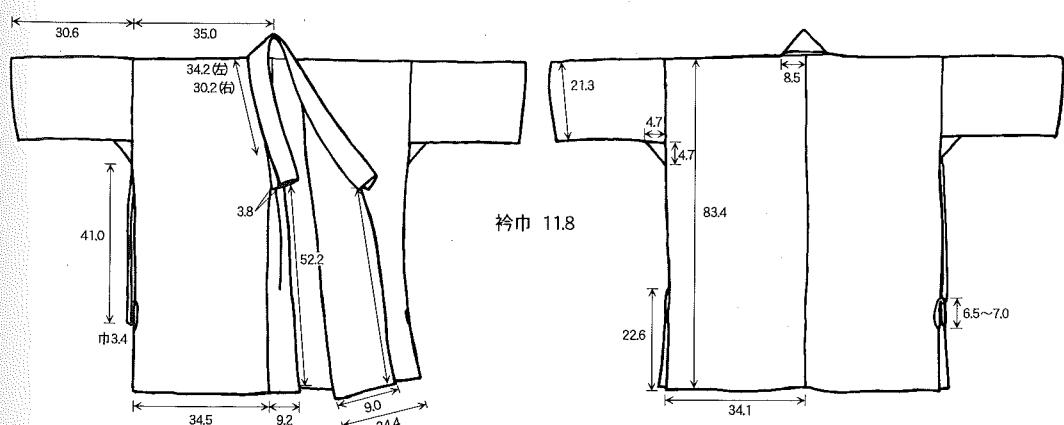
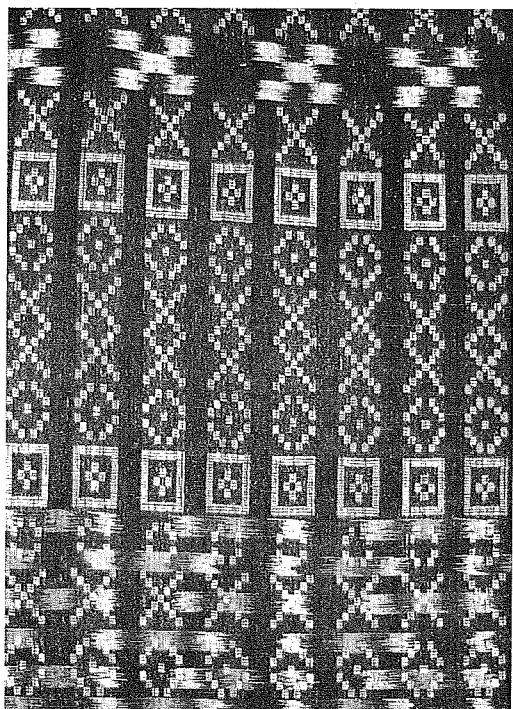
染 色：地（経緯：濃紺→琉球藍）

浮（経：白・赤→？・顔料で手差し）

紗（緯：白・赤→顔料で手差し）

資料の特徴：裏なし。脇の紐は平絹。浮糸の色褪した部分と白紗の一部に朱の顔料で手差し。

由来・来歴：昭和30年受け入れ。宮里栄輝コレクション。夫人の宮里初子氏（旧姓石川）が戦前、知花で教員をしており、その際にティサジを収集している。この資料も当時、収集された可能性がある。



資料 No. : 3

資料名：読谷山花織着物

台帳番号：1584

素材：地（経：木綿単糸／緯：木綿単糸）

浮糸（木綿単糸2本取り）

織の技法：経浮花織・格子縞・経緯絢

織の密度：経20本/cm・緯15~16本/cm

染色：地（経緯：濃紺→琉球藍）

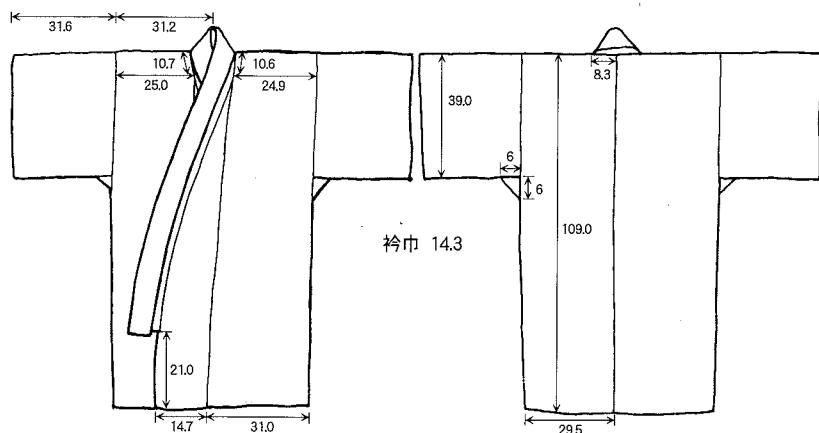
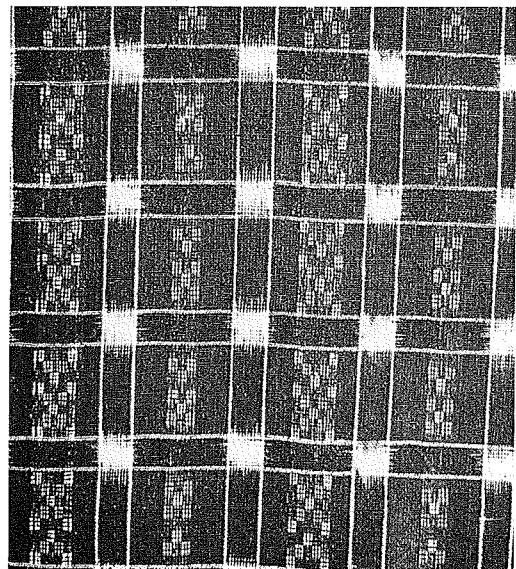
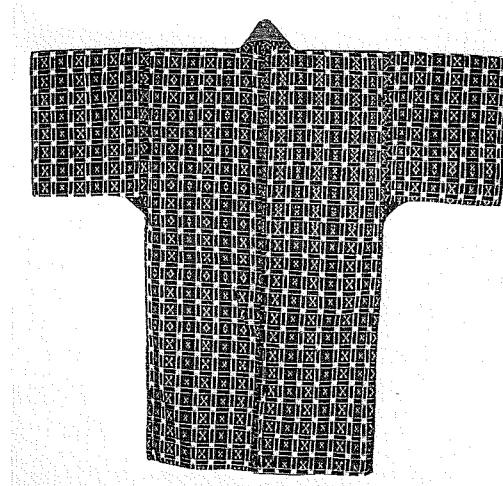
浮（経：白・赤→?）

絢（経緯：白）

格子縞（経緯：白）

資料の特徴：裏は木綿浅地小紋紅型。紅型の花模様と浮糸の朱の色の部分全体に顔料の朱が薄目に差されている。

由来・歴歴：昭和30年11月20日受け入れ・文化財キャラバンで京都より収集した資料の一部。  
西村仙之助コレクション



資料 No. : 4

資料名：読谷山花織着物

台帳番号：1589

素 材：地（経：木綿単糸／緯：木綿単糸）

浮糸（木綿単糸 2本取り）

織の技法：経浮花織・格子縞・経緯紗

織の密度：経20本/cm・緯15本/cm

染 色：地（経緯：濃紺→琉球藍）

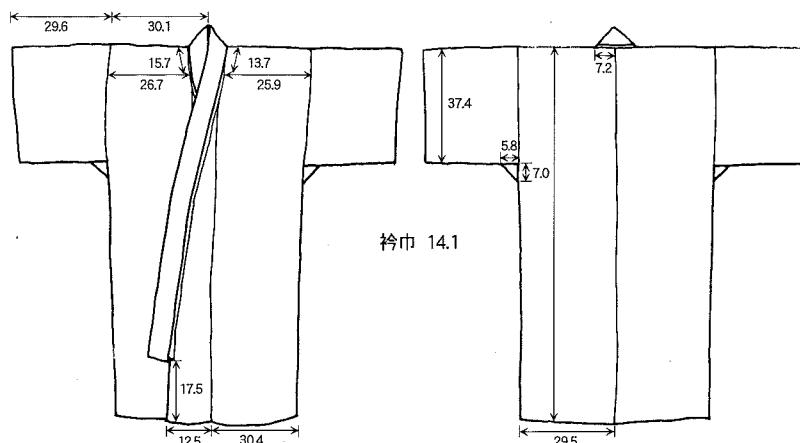
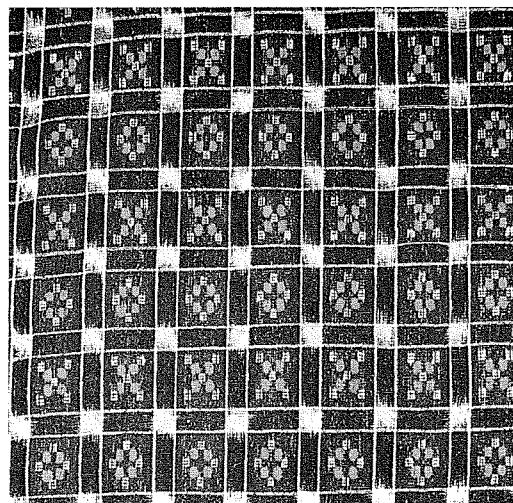
浮（経：白・赤→？）

紗（経緯：白）

格子縞（経緯：白）

資料の特徴：裏は木綿浅地紅型。紅型の花模様と浮糸の朱の色の部分全体に顔料の朱が濃い目に差されている。

由来・来歴：昭和30年11月20日受け入れ・文化財キャラバンで京都より収集した資料の一部。  
西村仙之助コレクション



資料 No. : 5

資料名：織物裂② 読谷山花織

台帳番号：7104

素 材：地（経：木綿单糸／緯：木綿单糸）  
浮糸（白：木綿单糸2本取り／赤：木  
綿双糸2本取り）

織の技法：経浮花織・格子縞・経緯絹

織の密度：経19~20本/cm・緯14本/cm

染 色：地（経緯：濃紺→琉球藍）

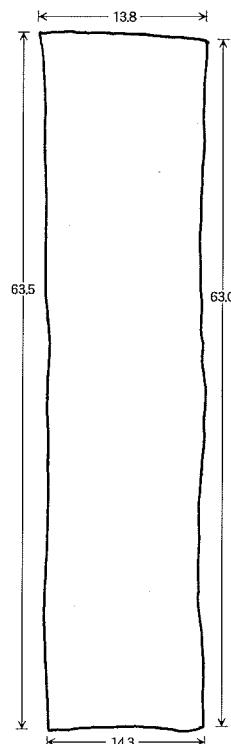
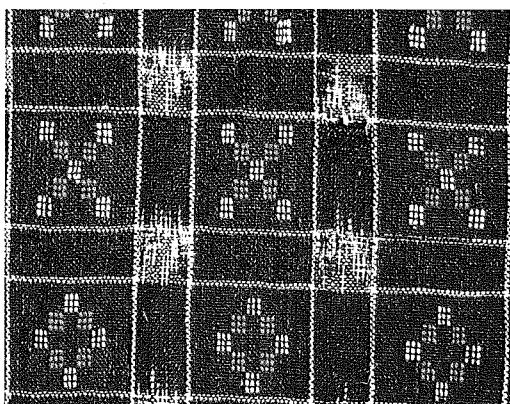
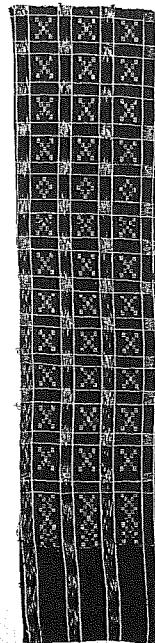
浮（経：白・赤→?）

絹（経緯：白）

格子縞（経緯：白）

資料の特徴：布は両脇が裏に7~6返されおり、縫  
い糸と思われる青い木綿糸がみられる。  
衿等の部分と思われる。緯絹は手結い  
のぎらしの絹（ミミグワーユイ）であ  
る。

由来・来歴：1981年受け入れ。横浜国立大学教授の  
鹿間氏の収集品。



資料 No. : 6

資料名：木綿紺地格子に絢経浮花織着物

台帳番号：15379

素 材：地（絹：木綿単糸／緯：木綿単糸）

浮糸（木綿単糸2本取り／3本取りに

見える部分もある）

織の技法：経浮花織・格子縞・経緯絢

織の密度：絹20本/cm・緯14~16本/cm

染 色：地（絹緯：濃紺→琉球藍）

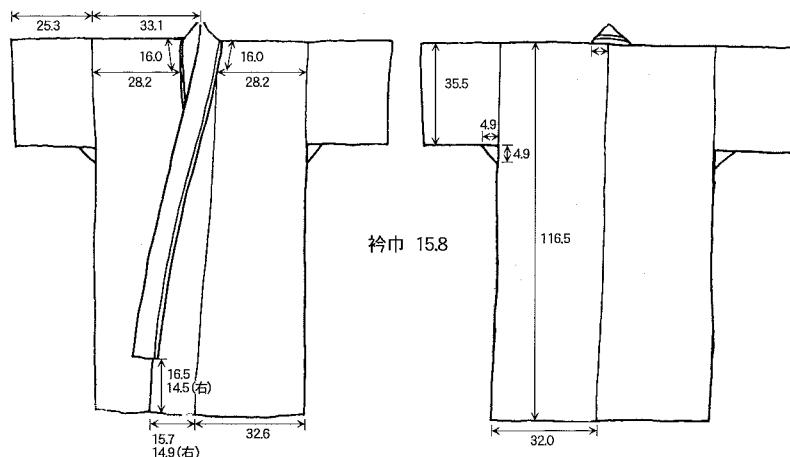
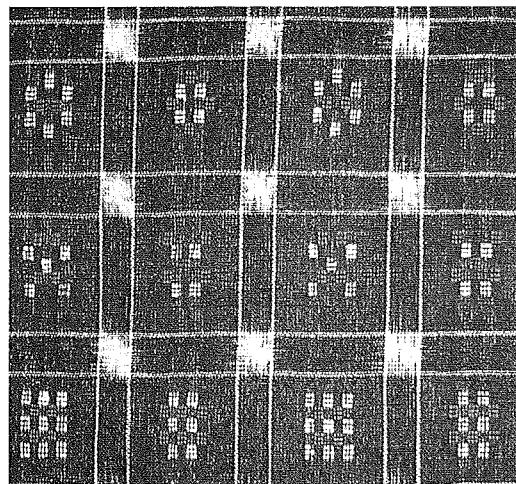
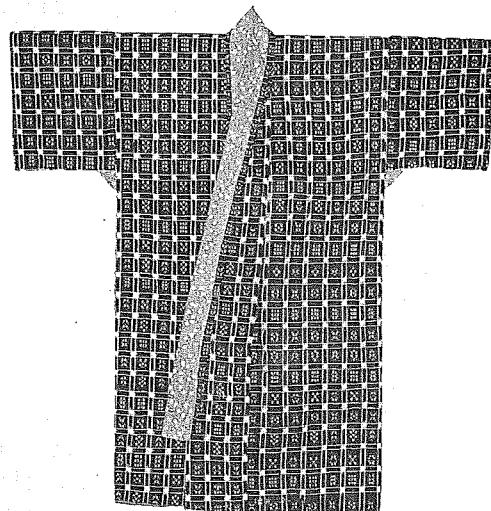
浮（絹：白・赤→?）

絢（絹緯：白）

格子縞（絹緯：白）

資料の特徴：ウスデークジンと呼ばれ、祭り衣裳であった（平田ハル氏談）。格子と経緯絢に経浮花織のパターンはいくつか類似の例がある。裏は緑地小紋紅型。

由来・来歴：1996年3月受け入れ。平田カマド（沖縄市登川／明治21年～昭和55年）が18歳の時（1906年）に織り、仕立て、ウスデークで使用したもの。



- 註1) 沖縄本島中部では、明治末期、1900年を境とした辺りから花織は織られていない。資料6が1906年に製作されており、それ以後はっきりした記録はない。読谷村の花織については、昭和39年頃から復興された。奄美地方の花織は、昭和62年に鹿児島県大島紬技術指導センターが試験的に花織・浮織に着手しており、1990年には安田謙志氏が復元と創作を行っている。  
(参考資料:P3-4『読谷ブックレット3 輝く読谷山花織 その復興に情熱を傾けた二人』  
読谷村役場 1997/P44-49「奄美花織の復元と創作」『染織α112』1990.7)
- 註2) 「読谷山花織について」『読谷山花織展』沖縄県立博物館 昭和54年  
P63 辻合喜代太郎・橋本千榮子「知花花織胴衣」『琉球服装の研究』関西衣生活研究会 平成3年  
P2、P24-81『読谷村立歴史民俗資料館開館20周年記念 企画展読谷山花織展』読谷村立歴史民俗資料館 1995年  
P3-4 柳悦州「沖縄とラオスの織物」『民藝 第五百二十四号』日本民藝協会 1996年  
P18 柳悦州「沖縄の紋織物」『沖縄県史料調査シリーズ第1集・沖縄県文化財調査報告書第126集 沖縄の染織(I) 染織品編』沖縄県教育委員会 1997年  
幸喜『旧美里村における経浮花織技法の調査・研究および復元』1998年
- 註3) 「知花花織」は、知花地域を中心として行われていた経浮花織、縫取花織などの織物を含めた総称である。2000年8月に沖縄市経済文化部商工労政課によって知花花織復元作業所(沖縄市知花)が開設される。
- 註4) P45 幸喜『旧美里村における経浮花織技法の調査・研究および復元』1998年  
P292-P294/P320-321/P414/P468-469『沖縄市史』第七巻 資料編6・上
- 註5) P416-417 『沖縄市史』第七巻 資料編6・上
- 註6) P47 幸喜『旧美里村における経浮花織技法の調査・研究および復元』1998年
- 註7) 平田ハル氏(沖縄市登川在/大正15年生)談(平成13年10月21日調査)
- 註8) P415 『沖縄市史』第七巻 資料編6・上  
P175,543『沖縄市史』第八巻 資料編7・上
- 註9) P78 田中『沖縄織物の研究=別冊』紫紅社 昭和51年
- 註10) P21,25,『工業指導所20のあゆみ 染織技術支援編』沖縄県工芸指導所 平成8年
- 註11) 與那嶺貞氏談(昭和54年1月27日)  
経浮花織の織り方について筆者(與那嶺)が尋ねたところ『経糸の仕掛けは二重ちぎりではないかと思う』との返答があった。
- 註12) P61『技と美 大城志津子図案集』沖縄県立博物館 1991  
大城慧子氏談「機仕掛けは、地糸用のちぎりとは別に、八重山上布の短高機の経糸用のアヤツブルを浮糸用のちぎりとして使い、高機の上に設置した」(平13年2月)
- 註13) P111 田中俊雄「手巾について」『工藝 113号』日本民藝協会 昭和18年